

戦後フランスの大学入学資格試験制度の 動向についての一考察

宮 脇 陽 三

〔抄 録〕

今日のフランス大学入学資格試験制度（バカロレア）は、1985年に国民教育大臣シュベヌマンによる「18歳人口の80%をバカロレア水準へ」という教育政策目標が提唱されて以来、そのための職業高校と職業バカロレアの創設にともなって、高等教育の大衆化段階から普及化段階への移行を推進する有力な手段となっている。1997年6月にはバカロレア受験者は同年代の若者の80%に相当する約62万8千人に増加し、その合格者も47万1千人に達し、合格率は75%であって、合格者数と合格率は年々増加の傾向にある。

この小論では、この大学入学資格試験制度の第2次世界大戦後から今日までの改革の動向を、(1)バカロレアの語源、(2)大学入学資格試験制度の社会機能、(3)大学入学資格試験制度の合格者数と各学科別合格者数の進展、(4)大学入学資格試験制度の各学科別合格者数の割合(5)大学入学資格取得者数の同年令人口比率の進展、(6)受験者の出身社会階層別格差の状況、(7)大学入学資格試験制度の運営状況について考察しようとするものである。

キーワード バカロレア（大学入学資格試験）、バシュリエ（大学入学資格学位取得者）、リセ（普通高校）、リセ・テクニク（技術高校）、リセ・プロフェッショナル（職業高校）

1 バカロレアの語源

フランスの大学入学資格試験制度は通常はバカロレア（baccalauréat）または略称してバック（Bac）と呼ばれている。これは大学入学資格学位取得者（bachelier）という称号を授与する大学の第一次学位を示す語である。

中世パリ大学において神学部、法学部、医学部への進学資格取得者など、一般に社会的にはまだ準社会人程度の人を示すラテン語バカラリウス（baccalarius）を、面白半分に「月桂樹

の実」を示すバッカロリ（*baccalauri*）に改変し、バカロレアツス（*baccalaureatus*）と呼んでいたのだが、16世紀にフランス語風にバカロレアと呼ぶようになったのである。

バカラリウスがバッカロリになった理由として考えられることは、発音が似ていることと、ロリ（*lauri*）のフランス語訳がローリエ（*laurier*）（月桂樹）であり、月桂樹は太陽神アポロの聖木として、古代ギリシャのオリンピアの祭典で勝利や栄光の象徴とされていたことである。

そのために今日でもマラソン勝者は月桂樹の枝を冠にしている。月桂樹の光沢のある緑色の葉は、楕円形で先が細く、春には小さいクリーム色の花が房になって咲き、暗紫色の実がなる。原産地の地中海沿岸の月桂樹の実にはシネオールという精油が多く含まれ、最も芳しいといわれる。

月桂樹の摘みたての葉には苦みがあるが、乾くにつれて風味豊かになる。葉を乾燥させてから2～3週間後に、とりわけすばらしい香りを放つようになる。乾燥させた葉には抗菌・殺菌作用があり、防虫効果にすぐれているので、米びつに入れておくとコクゾウムシを防ぐことができるのである。

なおロリ（*lauri*）の派生語はラウルス（*laurus*）であり、その語源はラウス（*laus*）で称賛という意味がある。したがって16世紀頃から使用されてきたバカロレアという用語には勝利の栄冠を称賛するという意味もこめられていたといえることができるのである。

2 大学入学資格試験制度（バカロレア）の社会機能

フランスの有産市民階級はバカロレアによって、つねに再生産され続けているのである。バカロレアは、ゴブロ（*Goblot, E.*）（4, 15～16）によれば、フランスの大衆階級にとって重大な壁であり、国家権力が保証する公的な壁である。

国家は大衆階級が有産市民階級の中へ進入してくるのを、バカロレアによってくい止めているのである。大衆階級は有産市民階級へ出身出世していくためには、まず大学入試資格取得者（バシュリエ）にならなければならないのである。ある家族が大衆階級から有産社市民階級へ上昇するためには、一代だけでは到達することはできない。家族が子弟に中等教育を与えることができ、大学入学資格試験に合格させることができた時にのみ、その子弟が有産市民階級へ参入するための通行証（パスポート）を手に入れることができるのである。

このバカロレアという壁は水準である。バカロレアはリセ最上級学年における学業の履修を認定するのである。バカロレアは大学入学資格試験であると同時に、中等教育修了認定試験なのである。したがってバカロレアの合格者であって始めて、一般教養の持ち主であり、大学での専門教養を履修することが公認されることになるのである。それゆえバカロレアで不合格になることは、とくに有産市民階級にとっては生きるに値しない無意味なことになってしまうの

である。

ところでバカロレアの合格者の中では、試験の専攻学科の評点が最近では問題になっているのである。国立行政学院や理工科学校や高等師範学校などの有名校の専門大学校（グラン・ゼコール）への進学にあたっては、バカロレアのA（文学）科かC（数学）科の評点が一発の挑戦で秀（トレ・ビアン）を取ることが絶対の条件になっているのである。

ただし日常の社会生活の中では、バカロレア免状の取得にあたっての評点の中身が吟味されるようなことは、まったく無いのである。そこではたんに大学入学資格免状を持っている人かどうか、有産市民階級と大衆階級を区別するための唯一の絶対的な基準となるのである。バカロレアは有産市民階級へ参入するための壁であると同時に水準として機能するのである。

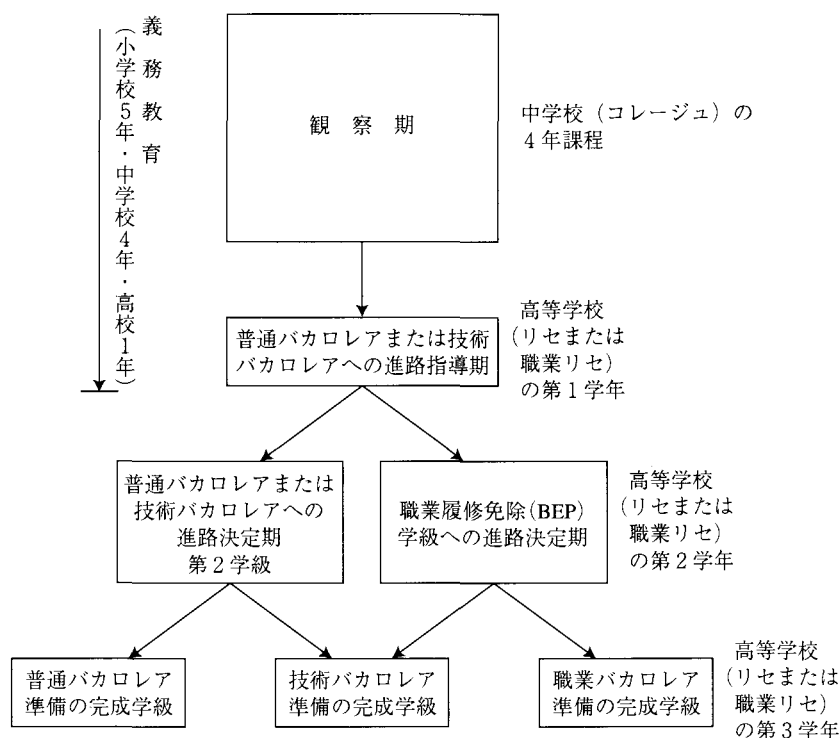
人間が形成している社会では、どのような社会体制の社会であっても、そこには階層が形成されるのである。それは大別すると指導階層と従属階層になる。従属階層から指導階層への転換にあたって、そこを突破する時にいくつかの障害物が置かれ、そこを乗り越えた者だけを指導階層へ参入させるのである。

バカロレアはまさしくフランス社会における人材選抜装置として働くのであり、すぐれて社会的な機能を遂行するのである。それは大学入学資格取得者とそうでない人とを区別するとともに、有産市民階級と大衆階級を区別するための道具となるのである。

したがってバカロレアはフランス社会の中での階層化のための道具であり、社会の壁であ

第1表 フランスの資格水準

水準	資格・学位・免許状	平均賃金 (フラン)
第1	高等教育第3期課程（バカロレア取得後5年以上） 高度専門職業人対象の高等専門研究免状（DESS） 研究者対象の高度研究免状（DEA） 博士、技師（グラン・ゼコール卒業者） 大学教授資格（アグレジェ）	12,000 資格・学位手当 60%
第2	高等教育第2期課程（バカロレア取得後3～4年） 学士（licence）3年 修士（maître）4年	10,000～ 12,000 資格手当 30%
第3	高等教育第1期課程（バカロレア取得後2年） 一般教育課程免状（DEUG） 上級技術者免状 短期高等教育修了免状（BTS, DUT）	8,000
第4	バカロレア水準。大学入学資格取得者（バシュリエ）または中等教育修了証書取得者。大学入学資格未取得者。	
第5	有資格労働者。職業適性証書（CAP）または職業履修免状（BEP）養成課程修了者。職業高校（2年制）卒業者または普通高校・技術高校中退者。	
第5準	中学校卒業者または職業高校中退者。	
第6	中学校（4年制）の最上級学年以前の修了者。	



第1図 フランスの中等教育学校における進路指導の構造

り、資格社会の中での水準となるのである。有産市民階級と大衆階級を隔てる壁である大学入学資格試験は、同時に資格社会フランスの資格水準にもなっているからである。

フランス社会での資格水準は、〔第1表〕（4, 22～23）に示す通りである。

バカロレアは第4水準に位置づけられている。有資格労働者は第5水準の位置である。学士と修士は第2水準である。博士と技師は第1水準である。

フランスの中等教育学校はバカロレア試験準備教育体制として整備され運営されている。進路指導体系は、〔第1図〕（4, 22）に示すとおりである。

3 フランスの大学入学資格試験制度の合格者数および各学科別合格者数の進展

ナポレオン一世が1808年に大学入学資格試験（バック）を創設した当初では、文学バックと数学・物理学バックの二種類だけである。1809年のバックでは古典語、修辭学、歴史学、地理学、哲学、数学、物理学についての簡単な対話による口述試験だけであり、合格者は文学バシュリエの31人と理学バシュリエの1人の合計32人だけであつた。

大学入学資格取得者（バシュリエ）数の増加の状況は、〔第2表〕（4, 29）に示す通りである。

大学入学資格取得者の総数は、大学入学資格試験の創設以来、190年間が経過したが、この

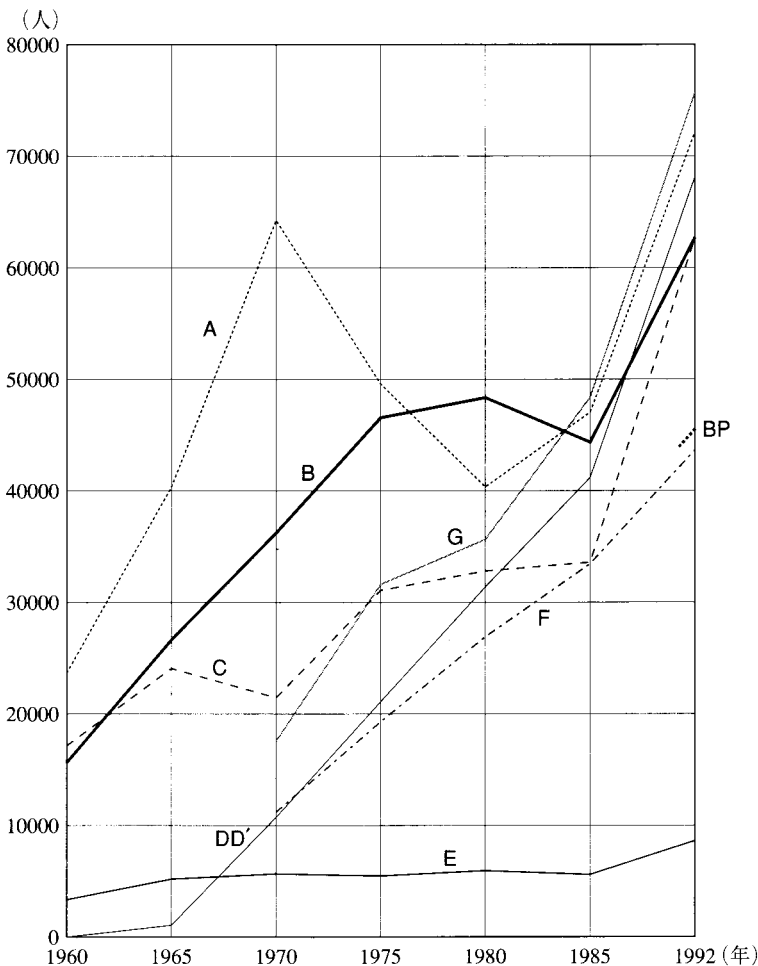
第 2 表 大学入学資格取得者数の進展

西暦 (年)	大学入学資格取得者 (人)
1809	32
1851	3,899
1861	5,522
1881	6,835
1891	8,147
1901	5,647
1931	15,007
1946	28,244
1947	28,000
1954	36,744
1960	59,297
1970	167,307
1985	222,429
1991	266,000
1992	436,159
1997	471,000

期間において大学入学資格取得者の急増期がみられるのである。

19 世紀の 90 年間と 20 世紀の第一次世界大戦頃までは千人台であるが，第一次世界大戦後の 1920 年代には一時期 1 万人の大台にふくれあがり，さらに 20 世紀の後半期では 1960 年と 1970 年の間に異常な急増期がみられる。とくに 1985 年以後は今日まで大学入学資格取得者数は年々増大してきているのである。

大学入学資格取得者数の年平均増加率は，〔第 2 図〕 (4, 29) に示す通りである。



第 2 図 フランスの大学入学資格試験制度の各学科別合格者数の進展 (1960-1992)

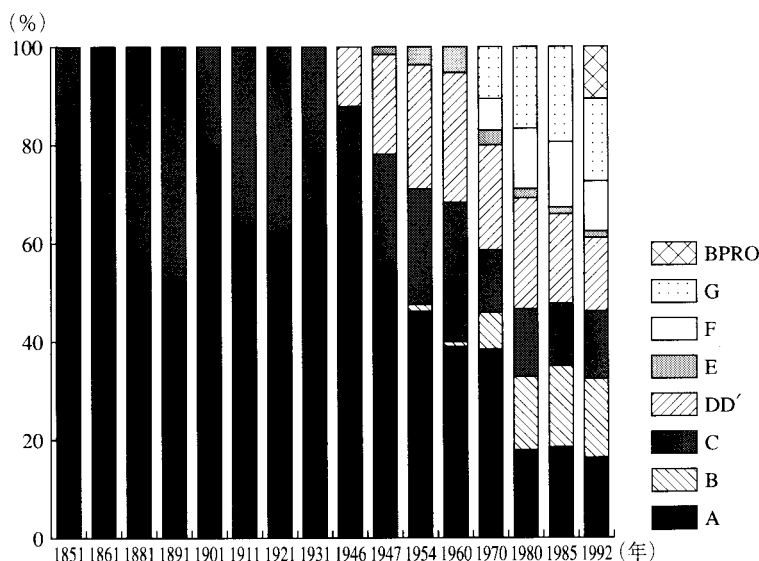
1960 年から 1970 年までの間では 2.88%，1980 年から 1985 年までの間では 2.61%，1985 年から 1992 年までの間では 7.88% である。

1960 年代は第二次世界大戦後の乳児の大量出産によって、高等学校（リセ）の収容定員が最も急激に増加した時期であった。フランスの人口は現在約 5 千 7 百万人であるが、出生数は戦後から 1970 年代まで 80 数万人台で推移し、70 年代以降は微減傾向にあり、90 年代は 71 ～ 72 万人台で推移している。

1988 年 6 月に行われたバカロレアの総カロレアは 1990 年代入ってから、2000 年に同年令人口の 80% をバカロレア水準へ持っていくために、年々合格者数と合格率を増加させているのである。

4 フランスの大学入学資格試験制度の各学科別合格者数の割合

フランスの大学入学資格試験制度の各学科別合格者数の割合は、〔第 3 図〕（4，29）に示す



第 3 図 フランスの大学入学資格試験制度の各学科別合格者数の百分比
 普通教育課程バカロレア A（哲学・文学から文学・人文学へ）科
 B（経済学から経済学・社会学へ）科
 C（基礎数学から数学・物理学へ）科
 D（実験科学から生物・医学へ）科
 D'（農学から農業・技術へ）科
 E（科学・技術から数学・技術へ）科
 技術教育課程バカロレア F（工業系技術者大学入学資格者）科，次いで（工業系技術大学入学資格者）科
 （1968 年創設）
 G'（商業系技術者大学入学資格者）科，次いで G（商業系技術者大学入学資格者）科
 H（情報系技術者大学入学資格者）科
 BPRO（職業系大学入学資格者）科（1985 年創設）

通りである。

A(哲学・文学)科は一世紀間に76.7%から38.6%へ推移している。A科の重要性は1851年から1954年までの約100年間をかけて、ほぼ半減したのである。ところが1954年の38.6%から1992年の16.4%まで、さらに半分以上も減少していくのであるが、それには僅か30年間しかかからなかったのである。

1960年までは、A(文学)科合格者の減少はC(数学)科合格者の進展に対応していたのである。高等学校の理数系教育課程はC(数学)科とD(実験科学)科、次いでD'(農業技術)科の新設によって充実が図られることになる。

1960年代のA(文学)科の減少は、B(経済・社会)科の進展ならびに技術者バカロレア(1969年創設)がかかわっているのである。この技術者バカロレアは1970年から1992年までの22年間で、バシュリエの4分の1以上を占めるようになったのである。

C(数学)科とD(実験科学)科の2学科は、1960年と1992年の32年間にA(文学)科と同じ割合で進展している。

B(経済・社会)科と技術者バカロレアと職業バカロレアは、同じ時期に急激に進展している。

A(文学)科の合格者数は3倍になり、またC(数学)科の合格者数は3倍から6倍に増加している。

D(実験科学)科の合格者数は4倍に増加している。しかしそれでもB(経済)科とF(工業技術者)科とG(商業技術者)科、さらにBPRO(職業系バシュリエ)科の各合格者数の目ざましい進展には及ばなかったのである。とくに職業バカロレアは1985年に創設されたばかりであるのに、1992年には23万人以上の合格者を出すようになり、合格者総数の53%を占めるようになったのである。

F(工業技術者)科バシュリエの進展は困難になってきている。F科の合格率はC(数学)科とE(数学・技術)科の合格率よりも低いが、これはフランスの学校における技術教養に与えられている地位を反映しているのである。F(工業技術)科の進展は、同じF科内部のF8(医療)科とF11(社会秘書)科とF12(音楽・応用芸術)科を除くと、G(商業技術者)科の進展と比べると2倍も遅いのである。

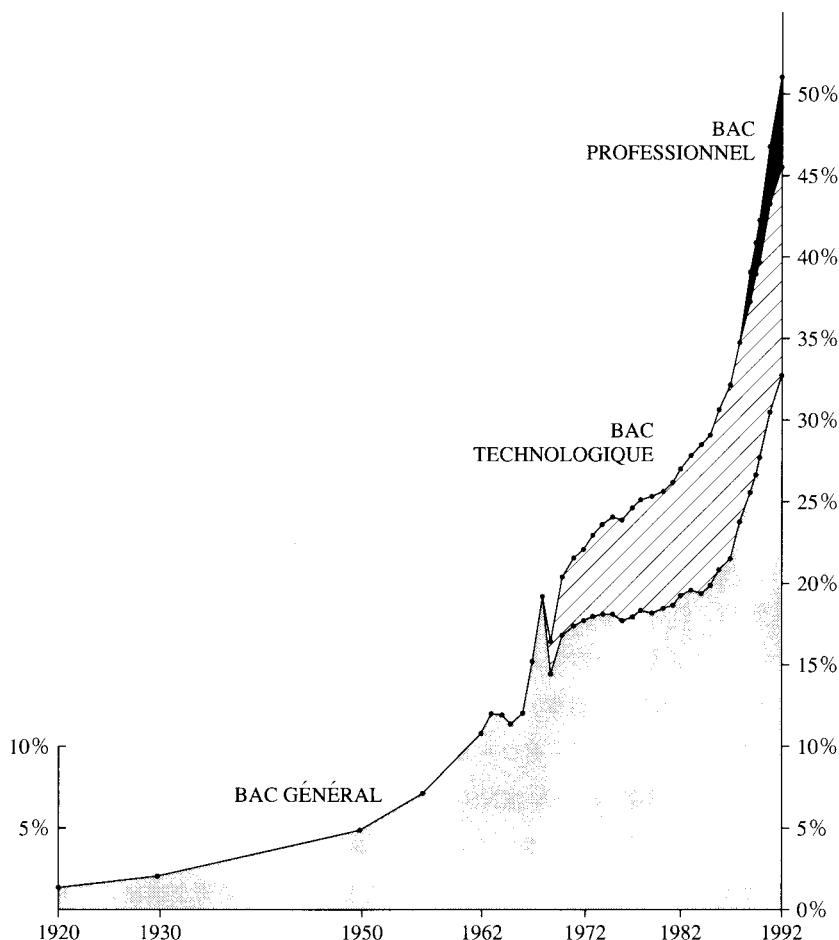
1980年代の10年間ではC(数学)科バシュリエ数とD(数学・技術)科バシュリエ数は合算されることになった。グラン・ゼコール(専門大学校)の有名校の理工科学校(EP)、国立行政学院(ENA)、高等師範学校(ENS)、パリ政治学院(シアンスポ)を目ざす受験者は、先ずバカロレアC(数学)科を秀(トレ・ビアン)の成績で合格することが条件となっている。そのためC(数学)科は1965年以来、一貫して抜群の優秀な成績の合格者を出しているが、1992年には遂に全学科の成績水準の首位に立ったのである。

5 大学入学資格取得者数の同年令人口比率の進展

大学入学資格取得者数が進展した理由は、第一に人口増加であり、第二に高等学校（lycée）の就学率の向上である。とくに高等学校の就学率の向上には、同年令層全体の中の高等学校への進学者人口の割合の増加によって示されるのである。この二つの要因が相互に同時に働き合って、大学入学資格取得者数の増加を促進したのである。

同年令層における大学入学資格取得者数の割合は、高等学校への就学率の向上と直接に連動しているのである。したがって同年令層の高等学校就学率または高等学校水準での同年令層の合格率は、大学入学資格取得者数と大学入学資格取得者数の同年令人口数の関係の結果なのである。

大学入学資格取得者数の同年令人口における割合の進展は、〔第4図〕（4，32）に示す通り



第4図 フランスの大学入学資格学位取得者の同年令人口比率の発展の動向

である。

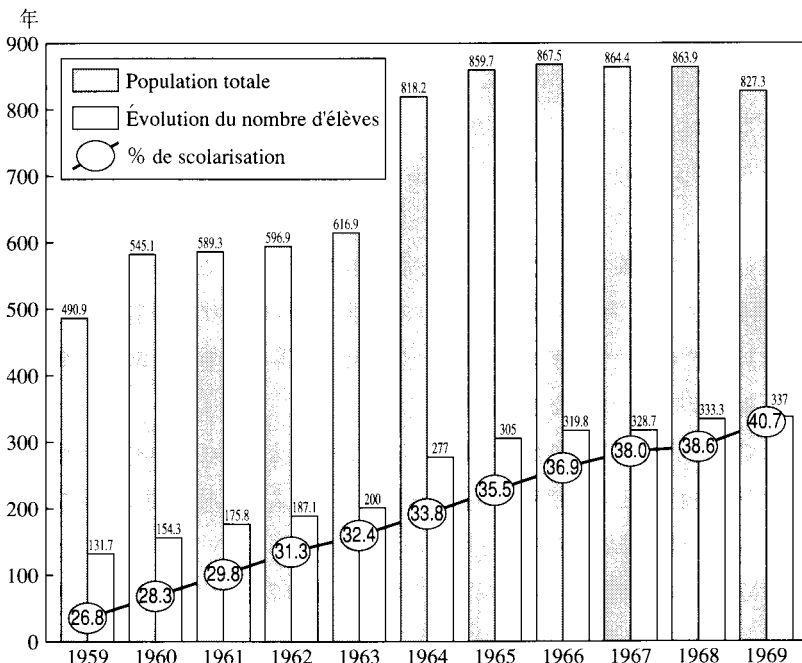
1950 年と 1960 年の 10 年間に於いて、大学入学資格試験における同年令人口の合格率は、5% から 10% へ 2 倍も増加したのである。1960 年代では人口と高等学校就学率の増加は連動していたのである。

この人口増加は本質的に 17 歳人口の戦後の著しい出生数の増加によるものである。1960 年における 17 歳の高校生は 1943 年の出生であり、1961 年における 17 歳の高校生は 1944 年に出生しているのである。17 歳人口が高等学校最上級学年における就学年令になるのである。

第二次世界大戦直後の 1946 年と 1947 年に、爆発的な出生数の増加がみられたのである。これはそれから 17 年後の 1963 年から 1964 年までの時期に、17 歳人口は 61 万 6900 人から 81 万 8200 人へ 20 万人以上も増加したのである。このことが 1960 年代の高等学校最上級学年における 17 歳から 18 歳までの在学生徒数が急増した理由である。

17 歳人口総数と高等学校進学者数と高等学校進学率の進展は、〔第 5 図〕(4, 31) に示す通りである。

高等学校進学者数の増加率は人口増加率を上廻っているのである。1959 年から 1969 年までの間に、17 歳の生徒の高等学校進学率は、26.8% から 40.7% へ移行し、増加率は 15 ポイントに達している。つまり 16 歳における高等学校進学率は 52% 以上も増加したのである。同年令人口も、この時期には 49 万 9000 人から 82 万 7300 人へ 68% も増加したのである。



第 5 図 フランスの 17 歳人口の総数と高校進学者数と高校進学率の発展の動向

1963 年と 1964 年において、人口圧力の爆発がみられる。しかし 1959 年と 1969 年の 10 年間における高等学校進学者数は 20 万 5000 人の増加であり、155% の増加にとどまっている。17 歳人口総数の増加は 68% であったために、1960 年代の高等学校進学者数は 52% の増加になったのである。

1960 年と 1992 年の間に、大学入学資格取得数の同年令人口の中での割合は 52% になっている。これは 18 歳から 19 歳までの同年令人口の中での大学入学資格取得者数の割合は半分以上になるということである。中等教育後期課程としての高等学校進学率は 1960 年代から今日まで一貫して向上してきているのである。

1985 年 11 月に国民教育大臣シュベヌマンは西暦 2000 年までにバカロレア水準に達する者の割合を、当該年令層の 80% にまでもっていくという政策目標を想定した。このバカロレア水準とはバカロレア取得ではなくて、後期中等教育課程の高等学校最上級学年、リセの場合は最上級、職業リセの場合は職業バカロレア準備課程 2 年目を意味するのである。

シュベヌマンのバカロレア水準 80% という目標は、その後国民の合意を獲得するようになり、1986 年の政権交代で生まれた右派のシラク政権は、この政策目標を受け継いだのである。ともかく 1980 年代から今日までの大学入学資格取得者数の増加は、本質的には高等学校進学率の増加によるものであり、同年令人口における高等学校進学者数は 1960 年代のそれと比べると安定していたのである。

1982 年から 1992 年までの 10 年間における大学入学資格取得者数の増加は、大学入学資格取得数の教養水準を認定する価値についての疑念を起こさせるかもしれない。「バック（Bac）はもはや何の価値もない」（4, 34）といわれることも全くないというわけではない。

ただし大学入学資格試験によって認定される学力水準と、同じ大学入学資格免状の社会的価値とを区別することは必要である。バカロレアは普通バックにおいては 8 学科があり、1969 年創設の技術バックにおいては 17 学科がある。1985 年創設の職業バックにも多種多様な専攻学科がある。

したがって各専攻学科間での学力水準に格差があることは予想されるのであるが、しかし 1944 年の中等教育大学入学資格試験の数学科の大学入学資格免状所得者の学力水準と、1960 年の普通バカロレア C（数学）科の大学入学資格免状取得者の学力水準との間に格差があるかどうかを見きわめることはかなり困難なのである。

それに対して、大学入学資格免状の市場価格は 1944 年と 1960 年のそれを比べると、1944 年の大学入学資格免状の社会通用価値は、1960 年のそれよりも相対的に高くなっているということは、市場での需給関係からみても明らかである。

大学入学資格免状取得者数が多くなればなるほど、当該免状取得者の市場価格は流通価値の低下を招くことになり、大学入学資格水準での労働市場における雇用獲得のための就職競争は、ますます激化していくことになるのである。

大学入学資格免状の普及化とともに、資格取得者と社会的地位(職位)^{ポスト}との間には格差は増大していくことになる。大学入学資格免状の価値にふさわしい職位を獲得するためには、高等教育において大学入学資格免状に付加価値をもたらすような条件を補充して、相対的に有利な状況をつくり出すことが必要になってくるのである。

上級幹部職員(cadres)の社会階層の人は、このことを十分に認識しているのである。そのために、かれらはその子弟に教育投資を行い、また学校教育への過剰投資を行なって、大学における学業履修を将来の社会的地位に就職するための必要経費とみなしたのである。そうすることによって、高等学校への就学の民主化、さらに大学入学資格試験の民主化にともなう社会階層間での下降移動を回避する戦略を実行したのである。

ところで上級幹部職員の社会階層の人は、大学入学資格免状の市場価値の低下を予想していたとしても、これまで大学入学資格免状を取得していなかったその他の社会階層の人は、大学入学資格免状取得者が民主化以前に享受していた社会的特権の既得権益を、名称は同じの大学入学資格免状取得者に加わることによって獲得したいと期待したのである。

このような社会現象を、社会学者ブルデュー(Bourdieu, P., 1930-)は「一世代は誤用させられる」(4, 34)といったのである。教育制度が産み出した熱望と、それが実際に提供する機会とのずれは、大学入学資格免状の大量濫発という局面においては、大学入学資格免状の希少性と出身社会階層と進学世代構成員という総体の格差の程度によって影響を受ける構造的な事実なのである。

中等教育と高等教育の民主化政策によって、中等教育と高等教育へ新規に参入した社会階層の人は、中等教育と高等教育から排除され閉め出されていた過去の時代に、中等教育と高等教育が提唱していた過去の既得権益を、獲得しようと期待したのである。

もちろん、そのような熱望は、もし高校生の急増期より他の時期であれば、または他の社会的に有利な条件に恵まれている社会階層出身の人であれば、完全に実現されていたのであるが、現代のフランス社会の客観的情勢と機会においては、しばしば多少とも急激に労働市場や学校市場の審判によって否認されたのである。

学校民主化政策の最大の矛盾点は、現実の社会における大衆階級は中等教育および高等教育が高価なものであるために、あまり手出ししていなかったこと、また自由主義学校の観念形態をあまり深く認識することなしに安易に受け入れたこと、さらにこれまで閉め出され追放されていた中等教育と高等教育における保守主義学校を大衆運動によって打倒しなければならなかったということである。

6 受験者の出身社会階層別の格差の状況

大学入学資格試験の合格者の社会的変動の要因は、一般には男女差と年齢差と出身社会階層

第3表 1991年度の普通バカロレアと技術バカロレアの学科別合格者の男女比率

学 科	男子 (%)	女子 (%)	男女総数 (人)
A (哲学・文学)	18.5	81.5	70,174
B (経済・社会)	38.5	61.5	65,408
C (数学・物理学)	62.5	37.5	61,278
D (数学・自然の科学)	49.3	50.7	62,332
E (数学・技術)	94	6	7,919
F (工業技術者)	67.5	32.5	44,045
G (経済技術者)	33.5	66.5	70,368
合 計	44	56	381,868

という三つの変数に対応する格差である。

(1) 男女差による格差

1991年度の普通バカロレアと技術バカロレアの学科別合格者の男女の割合は、〔第3表〕(4, 35)に示す通りである。

D (数学・自然の科学) 科だけが男女の人数が均衡している。D 科以外の全学科において男女の格差が目立っている。最大の格差は A (哲学・文学) 科と E (数学・技術) 科でみられる。A 科では女子が圧倒的に多く合格しているが、E 科ではほんの僅少である。文学系と数理・技術系では男女の性別構成が著しく目立っている。

B (経済・社会) 科と C (数学・物理) 科と F (工業技術者) 科と G (商業技術者) 科とでは、ほぼ同じ割合で不均衡になっている。C 科と F 科の大学入学資格取得者数の3分の2は男子であるのに対して、B 科と G 科の大学入学資格取得者の3分の2は女子である。

男女間の一般的な分化は明らかである。男子は理数系と技術・工業系であり、女子は文学系と経済・商業系である。

(2) 年齢差による格差

原級留年なしで学業課程を履修した生徒は、高等学校（リセ）の普通課程または技術課程の最上級学年に到達した時には、小学校5年と中学校4年と高等学校3年の合計12年間在学していることになる。小学校準備級への入学年令は6歳であるから、バカロレア合格者の年令は、原級留置なしの場合には、18歳であると想定することができるのである。

1991年度の18歳と18歳未満者の大学入学資格取得者の割合は、〔第4表〕に示す通りである。

この〔第4表〕(4, 36)は学科別の大学入学資格取得者の年令差の相互関係を示したものである。女子バシュリエは男子バシュリエよりも年少である。バカロレアの全学科の合格者の

第4表 1991年度の18歳と18歳未満者の大学入学資格取得者の男女比率

学 科	男子 (%)	女子 (%)	合計 (%)
A (哲学・文学)	37.40	49.40	44.20
B (経済・社会)	37	49.90	45
C (数学・物理学)	68.90	82.60	74.10
D (数学・自然科学)	36.80	54.40	45.70
E (数学・技術)	55.60	61	56
F (工業技術者)	17.50	19.40	18.10
G (経済技術者)	8.90	13.40	11.90
合 計	37.67	43.91	41.16

41.16% は18歳および18歳未満の者であり、女子の43.91%が男子の37.67%に対応しているのである。

学科別の年齢分布は男女ごとに著しく変動している。理数系と技術系の年齢は最も低いし、また工業技術者系の年齢は最も高くなっている。

C(数学・物理)科とE(数学・技術)科のように、社会的威信が高ければ高いほど、18歳または18歳未満の女子の割合は高くなっている。C科の18歳未満の女子の割合は82.6%であるのに対して、男子は68.9%である。女子は普通バックと技術バックの全学科において、男子よりも良好な学業水準を占めており、男子よりも低年齢段階でC科の合格者になれるような進路指導を求めているのである。

(3) 職業別出身社会階層による格差

1990年の12歳から16歳までの生徒人口と、1992年の大学入学資格取得者の出身社会階層の分布状況は、〔第5表〕(4, 37)に示す通りである。

1990年の12歳から16歳までの生徒の社会階層別の生徒人口の割合と、1992年の出身社会階層別の大学入学資格取得者数の割合との格差は、バカロレア免状の取得が不平等であることを示しているのである。

例えば労働者の場合には1990年において12歳から16歳までの生徒人口が37.3%であるのに対して、1992年の普通バシユリエは13.6%である。

1990年の普通バカロレア合格者の出身社会階層別分布状況の比較は、〔第6表〕(4, 37)に示す通りである。

この表の第1欄は生徒の親の職業別社会階層を示している。

第2欄は出身社会階層別普通バカロレア合格者の割合の分布状況を示している。

第3欄は1990年の12歳から16歳までの出身社会階層別の生徒人口の割合を示している。

なお出身社会階層は生徒の親または身元保証人の職業によって分類している。

第5表 1990年の12歳から16歳までの生徒および1992年の大学入学資格取得者の出身社会階層別分布

社会階層	1990年の12歳から16歳までの生徒人口比（％）	1992年の大学入学資格取得者		
		普通バカロレア（％）	技術バカロレア（％）	合計（％）
農業従事者	4	3.8	4.2	3.9
手工業者・小商店経営者	9.5	11.1	12.2	11.4
上級幹部職員、上級専門自由業者	14.1	32.6	14.6	27.2
中級幹部職員・職工長	17.9	18.2	16.6	17.7
従 業 員	11.9	13.2	17.1	14.4
労 働 者	37.3	13.6	24.3	16.8
その他・無職	5.3	7.5	10.8	8.5
合 計	100 369,0972 人	100 272,366 人	100 118,860 人	100 391,226

第6表 1990年の普通バカロレア合格者の出身社会階層別分布の比較

出身社会階層	普通バカロレア合格者 （％） (1)	1990年の12歳から16歳までの生徒人口比（％） (2)	$i = \frac{(1)}{(2)}$ （％）	$\frac{i}{0.36}$ （労働者の百分比を基準とする） （％）
農業従事者	3.8	4.0	0.95	2.60
手工業者・小売商店経営者	11.1	9.5	1.17	3.25
上級幹部職員、上級専門自由業者	32.6	14.1	2.31	6.40
中級幹部職員・職工長	18.2	17.9	1.01	2.80
従 業 員	13.2	11.9	1.11	3.08
労 働 者	13.6	37.3	0.36	1.00
その他・無職	7.5	5.3	1.40	3.80
合 計	100 272,366 人	100 369,0972 人		

第4欄は12歳から16歳までの生徒人口の割合と、普通バカロレア合格者数の割合との相関指数を算定している。

例えば農業従事者の場合には $3.8 \div 4.0 = 0.95$ である。これはバカロレア合格者数の中での農業従事者の生徒数の割合は、もしバカロレア合格者数の中の農業従事者の生徒数の割合が、社会階層別人口の分布の割合と同じものであるとすれば、その95%を占めていることを示しているのである。

上級幹部職員の場合には、農業従事者の場合とは逆の現象がみられるのである。上級幹部職員の生徒の普通バカロレア合格者数の割合は、一般人口の割合と比べると2.31倍になって

いるのである。それに対して労働者の生徒の割合は、3 分の 1 でしかないのである。

第 5 欄は第 4 欄の各社会階層の i 値を労働者の i 値である 0.36 を基準として算定した指数である。

例えば農業従事者の場合では、 $0.95 \div 0.36 = 2.6$ である。上級幹部職員の場合では $2.31 \div 0.36 = 6.40$ である。これは労働者の男子がバシユリエになる機会が 1 である時に、上級幹部職員の男子はその 6.4 倍の機会をもっているということを示しているのである。

したがってバカロレア合格率は、受験者の出身社会階層によって明確に規定されているといえることができるのである。

例えば 1980 年に高等学校第 2 学年（第 1 学級と呼称されている）の S（総合理数）科へ原級留置なしで進級した生徒は、出身社会階層によってきわめて大きな影響を受けている。この高校第 2 学年 S 科は第 3 学年では C（数学・物理）科と D（生物・医学）科に分化するが、とくに C 科を経由してバカロレア試験 C 科に合格することが、名門エリート校の専門大学（グラン・ゼコール）へのリセ併設準備課程へ進学するための重要な決め手になるのである。ところが 1980 年に中学校第 1 学年（第 6 学級と呼称されている）へ進学した生徒の追跡調査（4, 38）によると、上級幹部職員の 100 人の生徒のうち 27.8% が、原級留置なしに高等学校第 2 学年 S（総合理数）科へ進級しているのに、労働者の生徒は 2.4% しか S 科へ進級していないのである。

最後に 1993 年 6 月の試験期における出身社会階層別および年令別の大学入学資格試験の合格率は、〔第 7 表〕（4, 38）に示す通りである。

大学入学資格試験の受験機会は生涯において 2 回だけに制限されている。この〔第 7 表〕をみると、18 歳および 18 歳未満の受験者の合格率は 83.6% であり、20 歳の受験者の合格率 65.3% と比べると、年少者の方が有利になっている。

また親の社会階層が裕福である受験者の合格率が 18 歳および 18 歳未満では 86.5% であるのに対して、親が生活困難の受験者の合格率は 76.8% であって、約 10% の格差がみられるのである。ただし受験者の年令が高くなっていくにつれて、親の社会階層による格差は約 5% に縮小しているのである。

第 7 表 1993 年 6 月の試験期における出身社会階層別および年令別の大学入学資格試験の合格率 (%)

年 令 1993 年 12 月 31 日現在		18 歳および 18 歳未満 (%)	19 歳 (%)	20 歳 (%)
親 社 会 階 層 の	裕 福	86.5	72.1	67.3
	普 通	82	69.1	65.7
	生 活 困 難	76.8	65.7	62.3
合 計		83.6	69.6	65.3

フランスの大学入学資格試験制度は 19 世紀および 20 世紀において、フランスの社会と文化と技術の重大な分裂を引き起こしてきたのである。19 世紀初期における文学と口述試験の支配期、次いで理数系の抬頭と筆記試験の登場（1830 年に国語、1840 年にラテン語、1864 年に哲学）、また 20 世紀における 1960 年の体育の必須科目化、1969 年における技術バカロレアの創設、1985 年における職業バカロレアの創設、さらに最近における女子受験者数の増大と男女別学の慣習による男女格差という社会的不平等を引きずりながらも、2000 年に同年令者のバカロレア水準 80% を目指している大学入学資格試験の特質は、フランス社会における有力な人材選抜装置として機能してきたということである。

かくしてフランスの大学入学資格試験制度は、フランス社会に文化的、技術的、経済的な要請にたえず対応しながら、それ自体は不死身の社会的構築物として建設されてきたといえることができるのである。

7 大学入学資格試験制度の運営状況

バカロレア試験は高校 3 年終了時の毎年 6 月に全国いっせいに行われる。受験者は通学していたりセの所在する県の試験場で受験する。

1 年前の高校 2 年終了時に国語予備試験（筆記および口述）が行われる。これは 1965 年以來はバカロレア試験は年一回だけ行われるようになったのであるが、それ以前は第 1 部試験と第 2 部試験に分れて実施されていたのである。それゆえ国語予備試験はかつての第 1 部試験の生き残り科目として考えられるのである。この国語予備試験の成績点は本試験に加算されるのである。なお体育試験は本試験が 6 月に行われるのに対して、通常は 1～2 カ月早く 4 月か 5 月に行われるのである。

高校第 3 学年末に行われる大学入学資格試験は、必修試験と選択試験の第 1 群試験と第 2 群試験に分れて実施される。第 2 群試験は調整試験とも呼ばれている。

試験科目は各学科専攻別に異なるのである。第 1 群試験では少なくとも 20 点満点で平均点が 10 点以上のものが合格となる。平均 8 点未満の者は不合格となる。平均 8 点以上で 10 点未満の成績の受験者は、第 2 群試験を受験することができる。この第 2 群試験は口述試験であって、受験者は第 1 群試験の筆記試験の科目の中から 2 科目を自分で指定して受験する。この 2 科目の選択は、受験者に対する第 1 群試験の成績の通知後に、受験者が行うのである。

第 2 群試験の成績が第 1 群試験の成績を上廻っている時には、その上位の得点を最終の合否判定会議における合計点に算入することができるようになっている。このように第 1 群試験の成績と第 2 群試験の成績を比べてみて、受験者に有利な得点を算入できるようになっているので、第 2 群試験は調整試験とも呼ばれているのである。なおこの調整試験での成績を

考慮しても、それでも平均 20 点満点のうち平均 10 点未満の者は不合格となるのである。

ただし、大学区総長は平均 20 点満点のうち平均点 8 点以上で平均 10 点未満の成績の不合格者に対して、中等教育修了証書（略称 CFES）を、また技術バカロレアにおける同じ条件の者に対して、専門職業中等教育修了証書（略称 CFESP）を交付することができるのである。

第 1 群試験の一発だけで合格した者の成績の評点は、20 点満点のうち 16 点以上の者は秀（トレ・ビアン）、14 点以上 16 点未満の者は優（ビアン）、12 点以上 14 点未満の者は良（アセ・ビアン）、10 点以上 12 点未満の者は可（パスサブル）である。なお第 2 群試験を再受験して合格となった者は、平均点のいかんにかかわらず、すべて可（パスサブル）である。

試験委員会（jury）は受験者の合否判定にあたって、(1) 平均点 8 点以下、(2) 20 点満点で平均 10 点の壁を文句なしに突破した者、(3) 平均 8 点ぎりぎりの者、(4) 平均 10 点すれすれの者の 4 種類に分類する。

次いで試験委員会は、(1) を落第者とし、(2) を合格者とした後で、(3) と (4) について協議する。試験委員会は協議にあたって、試験での成績と受験者の出身校内申書を審査する。試験委員会は、試験科目の成績の点数と出身校での当該科目の成績の点数をにらみ合わせて、試験の成績の点数を加減する自由裁量権を有している。

6 月の学年度末の大学入学資格試験をやむをえない事情によって欠席した受験者は、正当な欠席理由の証明書を提出すれば、9 月の追試験を受験することができるようになっている。

試験委員会の合否判定は最終決定であって、いかなる再審査の異議申し立てもできない。ただし試験管理委員会（juge administratif）は、もし成績の評点の転写または転送の粗雑な誤りが証明された場合に限って、成績の評点の修正を命ずることができることになっている。

8 おわりに

フランスの大学入学資格試験の受験機会は、高校生は最終学年末と、その後の 1 回を合わせて、自分の生涯で 2 回だけである。それゆえ受験者にとってバカロレアは賭けである。

バックは 190 年間にわたって、つねに激しい論争の火種であった。1990 年には全国の高校生のデモもあり、闘争の標的になったのである。それゆえ大学入学資格試験制度は、あたかも建築技師の設計構想があまりにも多様であるために、さまざまな構想が重なり合い対立し合ったままの建造物のようなものになってしまったのである。

〔参考文献〕

- 1) Piobetta, J. B. Le baccalauréat, 1937.
- 2) ditto, Examens et concours, 1943.
- 3) ditto, Éducation nationale et instruction publique, 1944.

- 4) Solaux, G., *Le baccalauréat*, 1995.
- 5) 宮脇陽三『フランス大学入学資格試験制度史』風間書房, 1981 年。
- 6) 同上「フランスにおける大学入学資格試験制度の現状についての一考察」（佛教大学文学部学会『人文学論集第 17 号』所収）1983 年。
- 7) 同上「バカロレア資格試験制度の性格と現状」（国立教育研究所内フランス試験制度研究会編『フランス大学入試の改革動向』所収）1984 年。
- 8) 同上「最近のフランス大学入学資格試験制度の改革についての一考察」（佛教大学文学部学会『人文学論集第 21 号』所収）1988 年。
- 9) 手塚武彦「フランス——バカロレア制度の特徴と改革——」（中島直忠編著『大学入試』所収）時事通信社, 1986 年。
- 10) 藤井佐知子「フランスのバカロレア試験制度について」（『学習評価研究第 20 号』所収）1994 年。
- 11) Bourdieu, P. et Passeron, J. C., *La reproduction*, Ed. de Minuit, 1970. (宮島喬訳『再生産』, 藤原書店, 1999 年)
- 12) Bourdieu, P., *La distinction*, Ed. de Minuit, 1979. (石井洋二郎訳『ディスタンクション I』, 『ディスタンクション II』, 藤原書店, 1998, 1999 年.)

【備 考】文中の（ ）内の数字は文献番号と当該文献の引用ページ数を示す。

なお本稿は平成 10 年度佛教大学特別研究費による「生涯教育制度の研究」に関する研究報告の一部である。

（みやわき ようぞう 生涯学習学科）
（1999 年 10 月 15 日受理）